

卷之五

身



社

版

昭和三十八年一月二十日 印刷
昭和三十八年二月十日 発行

定価 三〇〇円

著者 柴田 鍊三郎
発行者 豊島 清史
印刷者 日本製版株式会社

発行所 株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(291)〇二三八番
振替東京五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

色

人

さ

間

か

の

だ

身

座

ち

八

三

五

蜃 気 楼

二五

北の果てから

一四

落 花

一五

装
幀

村
上

豊

さ
か
だ
ち

作家というものは、どんな荒唐無稽な小説を書いても、程度の差こそあれ、必ずその中に自分の経験を織り込んでいるものようである。須藤三郎が目下書いている剣戟小説は、勿論、読者奉仕過剰の空想の産物であるが、それにすらも、自分の経験をいくつか織り込んでいる。そのうち、主人公が、伏見の船場で、胸を患う私窩子しかしと出会って、旅籠で一夜を共に過ごし、目ざめた時には、すでに女は投身自殺していたという挿話は、殆んどそのままとい

うていい。

須藤は品行方正の方ではないから、旅の途次で、気の向くままに、女をひろっている。その女も、その一人であったが、いまでも鮮かに、須藤の脳裡に、その映像が生きているのは、そのおりの彼の立場も異常であったし、彼女の人生の終幕にあたっていたからである。

昭和十九年八月——須藤は、二回目の召集令状を受けとっていた。須藤が、醬油を二合あまり嚥下して仮病をつかい（たまたま、それを看破した軍医が、須藤と同じ大学を卒業していた誼によって）『発作性心動異常疾速症』という奇妙な病名をつけられて、召集解除されてから、恰度一年目にあたっていた。

須藤は、あまりに早い召集通知に、愕然となり、入隊場所を読んで絶望した。広島宇品の暁部隊へ来い、とあったのである。船舶部隊は、全国の部隊からのゴクツブシをあつめて、片っぱしから消耗している、という噂を、須藤は、どこからか、きいていた。

——こんどこそは、殺されるな。

須藤は、妻子と荷物を出舎へ払った空家同然の家の中で、二時間ばかり、茫然と坐り込ん

でいた。

突如須藤は、決然として、立ちあがった。

——よし！ 逃げてやる！ 絶対に捕まらんぞ！ 五年でも、十年でも、戦争が終るまでかくれさせてみせる。

で——、須藤は、ボストン・バッグに、大急ぎで、手あたり次第に、当座の必要な品物をつめ込んだ。ところが、いざ、それを携げてみて、ひどい重さに、ふっと、気が変った。これは、須藤の生来の悪癖であつた。学生時代に、北京へ行こうとして、出発予定日の前々日まで、大わらわになつて準備したくせに、一夜明けると、ふいに、気が變つて、須藤は、ぶらっと赤倉へ出かけて行き、そのホテルで、ぼんやり二月あまり過ごしたことがある。

須藤は、鞆の中から、全部抛り出すと、モオリス・バレスの『自由の人』アン・ノム・リイブル一冊だけを、書棚から抜きとつて、それらに代えた。須藤はべつに、モオリス・バレスが好きではなかつた。ただ、『自由の人』という題が、須藤に、そうさせたにすぎない。

須藤は、ぺちゃんこのボストン・バッグを携げて、東京駅から、汽車に乗った。

沼津のホームに停車すると、なんとなく、ふらふらと降りて、そして、べつに、あてもなく三津^{みつ}行きの漁船に、便乗した。須藤は、漠然と、伊豆の山中あたりに、かくれてやろうと、考えていたようである。むかしの兇状持ちが、三年も四年も、ほとぼりのさめるまで、身をひそめているのに、伊豆山中をえらんだ、という話を、なにかで読んでいて、それが暗示になっていたらしい。

須藤三郎が、三津のてまえの、さびれた入江にある棧橋に上ったのは、すで海面の色が灰に変わろうとする時刻であつた。

棧橋の途中に、浴衣の女がしゃがんでいたが、須藤は、べつに気にもとめずに、通りすぎようとした。

すると、女が、首をまわして、

「鞆が、からっぽね」

と言った。親しい隣人に言いかけるような、なにげない声音だった。

須藤は、女を見た。

細い目のまわりに、隈が刷かれていた。鼻と唇のかたちが、整っていて、須藤の好みに近かった。ゆるんだ襟もとからのぞいている胸は、あばらがかぞえられるくらいに痩せこけていた。須藤は、女の年齢を読むのは、甚だ不得手であつたし、この女は本当の年齢よりずっと老けているに相違なかつたし、二十七八とも、三十五六ともどうにでも受けとれた。

「鞆が、からっぽね」

という言葉に対して、須藤は、どんなせりふを返したか、はつきり記憶にのこっていない。

ともあれ、女は、やおら立ちあがつて、須藤と肩をならべたのであつた。

往還に出た時、須藤は、泊るところを世話してくれ、とたのんだ。

女が、須藤をつれて行つたのは、半年あまり前に営業を停止した小さな旅館であつた。旅館というよりも、木賃宿といった方がふさわしい、うす穢い家であつた。

須藤をおもてに待たせておいて、交渉していた女は、玄関へあらわれて、領いてみせた。

須藤は女について、二階に上り、むうっと熱気のこもる閉めきつた部屋に入った。

女は、窓を開け、押入れから座布団を出しておいて、階下へ降りて行き、塵がつもっていろいろな茶道具を持って戻って来た。

「七十二になるお婆さんが、ひとりきりのこされているの。孫が三人とも兵隊にとられちゃったんでね」

お茶をいれ乍ら、そう説明する女の横顔へ視線をあてた須藤は、いつか、どこかで、見たことがあるような気がした。この女自身に出会った記憶があるのではなく、映画のひとつまに、こんな場面があったような——そんな、しめっぽい感慨であった。

女は、須藤のボストン・バッグの空であることを咎めたくせに、須藤が、何故に、何処へ行こうとしているのか、一向に糺そうともせず、あたりさわりのない事柄を、シラブルを区切る物憂げな口調で、喋った。須藤も、ただの旅行者のように、それに相槌をうった。

やがて、海が、すっかり暗くなり、沖から渡って来る汐風の音が高くなると、須藤は、この忙しい無駄な時間がやりきれなくなり、

「君の家には、酒があるんだろう？」

と訊ねた。

「目から火が出る程高いよ」

女は、こたえた。

女が須藤をともなつたのは、「カフェ・プランタン」という看板をかかげた店であつた。気をきかせて書き添えた横文字の方は、スペルをまちがえていたが、それが、いかにもふさわしい佻しい構えであつた。

三坪ばかりの内部は、それでも一応、カフェの体裁をととのえていたが、肱掛椅子は、パシヤをはみ出させていたし、テーブルは跛になつて、がたがたと鳴って揺れた。勝手口との板仕切の前には、ビールの空箱や毀れた椅子や、その他のガラクタが、ごたごたと積みあげられてあつた。右手の磨硝子戸の向うが、居間になっているらしく、人の気配がした。二階は、女たちにとって、二重の意味をもつ座敷なのであろう。

酒は、おそろしく不味かった。

女は、いかにも物憂そうに、頬杖をついて、ゆっくりと須藤を団扇で、あおぎつづけた。

「何か話せよ」

須藤が、促すと、女は、妙なものでも眺める目つきで、見かえして、

「なんにもないわ」

と、こたえた。

「なにかあるだろう。……話がなけりや、お前さん、小唄ぐらいうたえそうだな」

女は、莫迦くさいといった風に、ふん、と鼻をならして、そっぽを向いたが、すこし間を置いてから、視線をもどすと、

「別れ山をやるうか」

「別れ山？」

「うん、京都の盆踊歌さ」

女は、団扇で、卓子を、ぱたんぱたんと叩いて調子を取り乍ら、ひくくうたいはじめた。